

「無垢」と「経験」— ロレンスの詩集『亀』を読む*

加 藤 英 治

はじめに

『亀』は1920年に書かれた亀をめぐる6つの詩から構成され、1921年にアメリカで出版された詩集である。イギリスでは『鳥も獣も花も』の一部として1923年に出版され、ようやく1982年に単行本の形で出版された。このイギリス版単行本詩集の編者デーヴィッド・エリスは、亀をめぐる6つの詩は、ロレンスの意図通り、連作詩として読まれるべきであると強く主張しているが、たしかに、連作詩という意識のもとに読んだとき、それぞれの作品がたがいに拮抗しあいながら、いわば磁場のようなものを形成していることに気がつく¹⁾。この磁場とは、「無垢」の世界から「経験」の世界へと向かう物語の流れを指している。この流れをたどりながら、ロレンスと「性」との、断定することの困難な、微妙な関係について考えてみたい。

1. 単独者とその宿命

亀は単独者として生まれてくる。彼はいまだ分節化されていない、それゆえ、手探りで進むほかはない未知の世界に生まれてくる。彼の前に広がっているのは混沌の宇宙であり、そこには道標一つない。いや、むしろ、既知の世界を道標一つない混沌の宇宙とあえて見なすのだというべきかもしれない。そのような混沌の宇宙を他のあらゆる生き物たちを率いてまさに孤独な長距離ランナーとして走り続けるのである。詩集『亀』を構成している6つの詩のうちの一番目、「亀の赤ん坊」がわたしたちに提示するのは、ユリシーズにも比すべき果敢な英雄としての亀の赤ん坊の姿である。

けれども、このような単独者としての亀の赤ん坊も、不可避的な分裂の宿命を負っている。詩人は亀の赤ん坊の背中や腹部に刻印された十字架の紋様のなかに彼の宿命を読み取ってしまうのである。二番目の詩、「亀の甲羅」は、亀の赤ん坊を待ち受ける分裂の宿命を透視する詩人の眼差しの深さをわたしたちに印象づけるということができる。

しかし、わたしたちは、まだ亀の赤ん坊の宿命に思い煩わされる必要はない。いましばらく、亀の赤ん坊とその家族の暮らしぶりにつきあわなければならない。

On he goes, the little one,
Bud of the universe,
Pediment of life.

Setting off somewhere, apparently.
Whither away, brisk egg?

His mother deposited him on the soil as if he were no more than droppings,
And now he scuffles tinily past her as if she were an old rusty tin.

A mere obstacle,
 He veers round the slow great mound of her—
 Tortoises always foresee obstacles.

It is no use my saying to him in an emotional voice :
 ‘This is your Mother, she laid you when you were an egg.’

He does not even trouble to answer : ‘Woman, what have I to do with thee?’
 He wearily looks the other way,
 And she even more wearily looks another way still,
 Each with the utmost apathy,
 Incognizant,
 Unaware,
 Nothing.

As for papa,
 He snaps when I offer him his offspring,
 Just as he snaps when I poke a bit of stick at him,
 Because he is irascible this morning, an irascible tortoise
 Being touched with love, and devoid of fatherliness.

Father and mother,
 And three little brothers,
 And all rambling aimless, like little perambulating pebbles scattered in the garden,
 Not knowing each other from bits of earth or old tins.

Except that papa and mama are old acquaintances, of course,
 Though family feeling there is none, not even the beginnings.²⁾

これは三番目の詩、「亀の家族関係」の冒頭である。互いに無干渉で無関心な単独者の集団としての亀の家族を描いているわけだが、あまりにも人間的な、すなわち、愛という旗印のもとに互いに拘束しあい、身動きが取れなくなってしまう家族に慣れ親しんでいるわたしたちにとっては、このような亀の家族のありようは、いささか常軌を逸した酷薄なものに感じられるかもしれない。けれども、かえって、このようなすがすがしい家族のあり方のうちにこそ、理想的な家族愛が実現されているかも知れないのである。人間ははなはだしく長い養育期間を必要とするという不利な条件を背負っているため、亀のようにはいかないが、詩人はおそらく自らが育った家庭を思いかえしながら亀の家族のなかにユートピアを見ているのではないだろうか。

2. 「唯我論的統一性」の喪失

亀に宿命が重くのしかかり始めるのは、四番目の詩、「彼と彼女」によれば、彼が思春期を迎えたときである。それはすでに詩人によって読み取られていたものだったが、亀は性、すなわち、欲望という十字架を背負わされることになる。彼は自らの単独性をうしない、欲望に苦しめられる、統一を欠いた断片と化してしまうのである。しかし、彼がうしなった単独性とは、「唯我論的統一性」であり、彼の宿命とは、そのような「唯我論的統一性」を超えて、「より大いなる完成」をもとめることである³⁾。

Alas, the spear is through the side of his isolation.
 His adolescence saw him crucified into sex,
 Doomed, in the long crucifixion of desire, to seek his consummation beyond himself.
 Divided into passionate duality,
 He, so finished and immune, now broken into desirous fragmentariness,
 Doomed to make an intolerable fool of himself
 In his effort toward completion again.

Poor little earthy house-inhabiting Osiris,
 The mysterious bull tore him at adolescence into pieces,
 And he must struggle after reconstruction, ignominiously.

And so behold him following the tail
 Of that mud-hovel of his slowly rambling spouse,
 Like some unhappy bull at the tail of a cow,
 But with more than bovine, grim, earth-dank persistence,
 Suddenly seizing the ugly ankle as she stretches out to walk,
 Roaming over the sods,
 Or, if it happen to show, at her pointed, heavy tail
 Beneath the low-dropping back-board of her shell.

Their two shells like domed boats bumping,
 Hers huge, his small ;
 Their splay feet rambling and rowing like paddles,
 And stumbling mixed up in one another,
 In the race of love—
 Two tortoises,
 She huge, he small.

かつては、ユリシーズにも比すべき、無敵の勇者ぶりを誇った亀は、いまや、道化に転落しており、しかもその表情は不機嫌で、自分の行為を恥じているようである。単独性の喪失、あるいは、存在の断片化という事態を、詩人は悲劇的にではなく、むしろ、いささか下品なドタバタ喜劇のスタイルを用いて描き出している⁴⁾。このスタイルは、大仰な悲劇的身振りよりも、かえって、道化に転落してしまった亀の情け無さ、惨めさ、哀しさをわたしたちに伝えることに成功しているように思われる。

不機嫌さの気分は五番目の詩、「亀の求愛」においても支配的であるが、とくに注目すべきは、他者への欲望を、内部から生じて亀を不機嫌にする不可避免的なものと呼んでいることである。

Grim, gruesome gallantry, to which he is doomed.
 Dragged out of an eternity of silent isolation
 And doomed to partiality, partial being,
 Ache, and want of being,
 Want,
 Self-exposure, hard humiliation, need to add himself on to her.

 Born to walk alone,

Fore-runner,
 Now suddenly distracted into this mazy side-track,
 This awkward, harrowing pursuit,
 This grim necessity from within.

Does she know
 As she moves eternally slowly away?
 Or is he driven against her with a bang, like a bird flying in the dark against a window,
 All knowledgeless?

The awful concussion,
 And the still more awful need to persist, to follow, follow, continue,
 Driven, after aeons of pristine, fore-god-like singleness and oneness,
 At the end of some mysterious, red-hot iron,
 Driven away from himself into her tracks,
 Forced to crash against her.

わたしたちは、内部から生じて亀を不機嫌にする不可避免的なものという言葉から、自然発生的な生命の流れという言葉を連想するかもしれない。なぜなら、性を自然発生的な生命の流れと見なすことこそ、ロレンスの思想の重要な要素と信じられるからである。とすれば、ここでは、なぜ、詩人は性を自然発生的な生命の流れと呼ぶことができないのだろうか。けれども、この問題はつぎのように問い直されるべきである。すなわち、詩人は自らの不機嫌さを封じ込めるためにこそ亀をめぐる6つの詩を書いたのではないだろうか、というように⁵⁾。

3. ペンテコステ

最後の亀の詩、「亀の叫び」はまさに亀の性ではなく、わたしたち人間の性こそが詩人にとって問題だったのだということを明かにする。すなわち、なぜ、わたしたちは性という十字架を背負ってしまったのか、なぜ、「唯我論的統一性」の状態に放置されていなかったのか、という問いが投げかけられる。この問いに答えるために、詩人は切り札を用いる。

Crucifixion.
 Male tortoise, cleaving behind the hovel-wall of that dense female,
 Mounted and tense, spread-eagle, out-reaching out of the shell
 In tortoise-nakedness,
 Long neck, and long vulnerable limbs extruded, spread-eagle over her house-roof,
 And the deep, secret, all-penetrating tail curved beneath her walls,
 Reaching and gripping tense, more reaching anguish in uttermost tension,
 Till suddenly, in the spasm of coition, tugging like a jerking leap, and oh!
 Opening its clenched face from his outstretched neck,
 And giving that fragile yell, that scream,
 Super-audible,
 From his pink, cleft, old-man's mouth,

Giving up the ghost,
Or screaming in Pentecost, receiving the ghost.

His scream, and his moment's subsidence,
The moment of eternal silence,
Yet unreleased, and after the moment, sudden, startling jerk of coition, and at once,
The inexpressible faint yell—
And so on, till the last plasm of my body was melted back,
To the primeval rudiments of life, and the secret.

わたしたちがここで詩人の切り札と呼んでいるのは、亀の欲望の成就の表現のなかにさりげなく紛れ込まされている、聖霊の交換、および、詩人自身による原初的な生命との融合である。詩人はまず欲望の成就を聖霊降臨と結びつけ、他者とのあいだの聖霊のやりとりという意味づけを性に与えている。そして、つぎに、亀とともに、自らも隠された真理が顕になる場に立ちあったことが語られる。詩人はこのようにして、ようやく、「唯我論的統一性」への執着をたちきり、あの不機嫌さをふききって、亀の、そして、人間の不可避的な変容を見渡す高みに登ってきたのである。

The cross,
The wheel on which our silence first is broken,
Sex, which breaks up our integrity, our single inviolability, our deep silence
Tearing a cry from us.

Sex, which breaks us into voice, sets us calling across the deeps, calling, calling for
the complement,
Singing, and calling, and singing again, being answered, having found.
Torn, to become whole again, after long seeking for what is lost,
The same cry from the tortoises as from Christ, the Osiris-cry of abandonment,
That which is whole, torn asunder,
That which is in part, finding its whole again throughout the universe.

詩人の目にはすでにすべてが明らかになっている。なぜ、亀が、そして、人間が単独性をうしなってまでも、他者をもとめなければならないのか。詩人は、よどみなく、完全なものが分裂し、分裂したものがふたたび統合され、完全なものとなるためと答える。亀、そして、人間が経験しなければならない苦悩、それは十字架上で「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」と叫んだキリストの苦悩、弟セトによって殺され、切り刻まれてナイル川に流されてしまったオシリスの苦悩に比せられるものであるが、「より大いなる完成」のために支払われるべき当然の代価と見なされるのである。

4. おわりに

「亀の叫び」にいたって、詩人はかつての自己を見下ろす高みに到達し、自己の苦悩の意味を発見したかに見える。いいかえれば、自らの不機嫌さを「復活」の物語のなかに封じ込めることに成功したかに見える。しかし、「亀の叫び」における最後の静寂は、仮構されたもの、詩人によって召喚されたものではないだろうか⁶⁾。わたしには詩人が「唯我論的統一性」へのこだわりを完全に棄てることができ

たようには思えないのである。この詩集のなかのそれぞれの詩が全体としての物語の一部に転落し、そこに帰属させられてしまうことを拒んでいるように思われるのである⁷⁾。それぞれの詩はまさに抜き差しならない存在であり、かりに、詩人が全体としての物語を志向したとしても、彼が乗り越えなければならなかったものたち、克服しなければならなかったものたちの存在を忘れるわけにはいかない。わたしたちはここで、ロレンス自身の心の領域にあえて踏み込んでいかざるをえないが、妻フリーダが、「ロレンスは心の底で、つねに女を恐れていた、女は結局男より強い力をもっていると感じていたと思う。女はそれほど絶対的で、否定できない存在なのです。男は活動します。彼の精神はあちらこちらへと飛んでいきます。けれども、女を超えていくことはできません。男は女から生まれ、そして、結局肉体と魂を必要として女に戻っていくのです。女とは万物が戻っていく大地のようなもの、また、死のようなものなのです」と述べていることは注目に値する⁸⁾。これはロレンス自身の、18歳の若者だったころを回想して、かつては自分のなかの性を憎悪したが、いまでは、それもまた自分にほかならず、自分の生命の一部であると認められるようになった、という述懐のいわば反措定となっており、女にたいする恐れとは、性による自己の変容にたいする恐れと読みかえることができよう⁹⁾。詩集『亀』には、単独者としての自己がうしなわれていくことへの不安と、それが不可避的であるという認識によってもたらされる不機嫌さを、「復活」の物語を通して、いわば宗教的な畏怖の感情へと変容させながら、その実、圧倒的な性の力を前にしてたじろぎ続けるロレンスの姿こそが読み取られるべきではないだろうか。

〔注〕

* 本稿は日本ロレンス協会第20回大会（1989年5月19日、明治大学）における口頭発表にもとづいている。

1. D. H. Lawrence, *The Tortoises*, ed. by David Ellis (Canterbury : Yorick Books, 1982), Introduction, p. 6.
2. D. H. Lawrence, *Selected Poems*, ed. by Keith Sagar (Harmondsworth : Penguin, 1976), pp. 144-45. 以下、『亀』からの引用はこの版によるものとし、末尾にページ数を記す。
3. 「唯我論的統一性」“solipsistic wholeness”という言葉は Harold Bloom のもの。See Harold Bloom, “Lawrence, Blackmur, Eliot, and the Tortoise,” *A D. H. Lawrence Miscellany*, ed. by Harry T. Moore (Carbondale : Southern Illinois Univ. Press, 1959), p. 362. また、「より大いなる完成」という言葉は Tom Marshall のもの。See Tom Marshall, *The Psychic Mariner : A Reading of the Poems of D. H. Lawrence* (London : Heinemann, 1970), p. 144.
4. Kenneth Inniss は亀の求愛行動を“tragic-comic”と呼んでいる。また、Lucy M. Brashear は同様に“sadly comic”と呼んでいる。See Kenneth Inniss, *D. H. Lawrence's Bestiary : A Study of His Use of Animal Trope and Symbol* (Mouton : The Hague, 1971), p. 75 ; Lucy M. Brashear, “Lawrence's Companion Poems : ‘Snake’ and ‘Tortoises,’” *D. H. Lawrence Review* 5 (1972), p. 57.
5. See D. H. Lawrence, “The State of Funk (written in 1929),” *Phoenix II : Uncollected, Unpublished, and Other Prose Works*, ed. by Warren Roberts and Harry T. Moore (New York : Viking, 1970), p. 569. また、Brashear は、『亀』のなかに Darwin 的なものを読みとっている。See Brashear, p. 60. Lawrence は1906年までに Darwin の *Origin of Species* を読んでいる。See Rose M. Burwell, “A Checklist of Lawrence's Reading,” *A D. H. Lawrence Handbook*, ed. by Keith Sagar (Manchester : Manchester Univ. Press, 1982), p. 67.
6. Brashear は“Tortoise Shout”における“an optimistic affirmation of faith”を指摘している。See Brashear, p. 61.
7. Harold Bloom, Sandra Gilbert, Gail P. Mandelle, Holly A. Laird は「復活」の物語を読みとるこ

とで満足しているように思われる。また、Keith Sagar は「復活」の悲劇を読みとることで満足しているように見える。See Bloom, p. 367; Sandra Gilbert, *Acts of Attention: The Poems of D. H. Lawrence* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1972), p. 188; Gail P. Mandelle, *The Phoenix Paradox: A Study of Renewal through Change in the Collected Poems and Last Poems of D. H. Lawrence* (Carbondale: Southern Illinois Press, 1984), p. 114; Holly A. Laird, *Self and Sequence: The Poetry of D. H. Lawrence* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1988), p. 139; Keith Sagar, “‘Little Living Myths’: A Note on Lawrence’s Tortoises,” *D. H. Lawrence Review* 3 (1970), p. 166. 注目すべきは Tom Marshall, Kenneth Inniss, Lucy M. Brashear, Lockwood のつぎのような読みである。

“From the minutely observed experience of the tortoise Lawrence makes an important statement of the tension between the value of independent single being and the need to seek a further wholeness in a larger union.” Marshall, p. 144.

“The poem projects the sense of the sacred terror of sex which, in his fiction, is inextricably mingled with its ecstasy. What we also find in the tortoise poems is a dramatization, more direct than elsewhere, of a male resentment of primordial duality.” Inniss, p. 76.

“Despite the fact that the speaker is aware that in a larger sense the turtle is ‘whole again,’ it is clear that this comprehension has not entirely compensated for the anguish felt when he heard the turtle cry out as he surrendered his arrogant but admirable individuality.” Brashear, p. 58.

“In the course of these six poems ..., we follow the development of the male tortoise from infancy to maturity. It is a development which Lawrence obviously deplores, however much he may be aware that it is inevitable, like that in *Sicilian Cyclamens*.” Lockwood, p. 132.

8. Frieda Lawrence, *Not I, But the Wind...* (1934; Carbondale: Southern Illinois Univ. Press, 1974), p. 57.

9. See D. H. Lawrence, “State of Funk,” p. 568.